

睡余小録——藤原吉迪

八水隨筆——著者未詳

歷世女裝考——山東京山

書僧贅筆——著者未詳

檜の落葉物語——伴林光平

金曾木——大田南畝

鋸屑譚——谷川士清

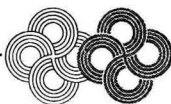
6

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第三卷
昭和二年六月廿八日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
發行者 吉川半七
發行所 日本隨筆大成刊行會



日本隨筆大成

〈第一期〉 6

昭和五十年六月 十日 印刷
昭和五十年六月二十五日 發行

編 者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目一番八号
電話東京八一三一九一五二（代表）
振替口座東京二四四番

製 作 〓 株式會社 たんちょう社

解 題

本集には、睡余小録、八水随筆、歴世女装考、書僧贅筆、櫛の落葉物語、金曾木、鋸屑譚の七種を収める。

睡 余 小 録 二卷附録一卷

河津吉迪 著

本書は好古図録と云う方が適當かと思われる内容で、古書画、古器物、書翰、芝居、人物等の図を掲げて、説明を加えている。本書の著者については、僅かに同好の士である西村出羽守正邦（西園寺家諸大夫）の序や、賀楽狂夫こと立入大和守経徳の跋によって、京都の人で、江戸に歿し、本書が其の遺稿である事が知られる。本書の附録は其の遺族の依頼によって収載した立入経徳の所蔵品の図録である。曲亭馬琴の『養笠雨談』には烟花城書画展覧の出品目録があるが、其の六十三点中十五点が賀楽狂夫所蔵のもので、本書に収められているものである。文化四年の刊行である。活字本としては『日本随筆全集』と本大成本に収められて流布している。

河津吉迪 又定迪とも云う。字は子彦、号は山白、藤原氏である。京都の人で好古の癖があり。書画の鑑定などもしたという。文化四丁卯十月十七日江戸で歿した。享年三十八。

八 水 随 筆 一卷

著 者 未 詳

本書は其の著者を明らかにすることは出来ないが、幕臣で、享保元文頃に、大御番を勤めた人と云う。柳営出勤中の見聞其の他、諸家の逸事等を伝え、最後には大岡忠相が荻生徂徠の門人となって学

問がしたいと望んだのを徂徠が、貴殿には今学問はいらぬと断つたと云う問答などが見えている。話は五十三条にわたる小節であるが、何れも興味深い話が多い。本書が注意されたのは、秋田矢島の人で、市河寛斎の門人として博識を以て知られた鳥海松亭が、本書の烟草一服一銭で売った条を柳亭種彦に抄写して送った事からで、遂に種彦が著者の自筆本を発見、世の知る所となったと云う事である。所が、残念な事には其の原本は後安田文庫に収まり大正震災に亡びたと云う。然し本書の内容は国会図書館、内閣文庫の文宝堂本、東京大学図書館の翟巢雜書中にも収められ、又活字本として『溫知叢書』二や旧大成一期第三冊及び『隨筆大観』によって流布するに至った。大成本の原本は無窮会本であった。

歴世女装考

四卷

岩瀬百樹 編

本書は、北川真顔から、湯女の古画を示されて、遊女か否かを問われてその究明に努めた事から其の端を発したと、自ら其の附言に云っている。此れが文政二年の春の事である。以来女装関係の記事の資料の蒐集に努め二十九年を経て弘化四年に至って稿を成したとある。本書の内容は鏡櫛髪油等女装に関するものに就いて古代より近世に至るまでの沿革を、古書古画によって之を徴し、外国の例も挙げて考証は努めている。本書の序文を歌人であり、『近世事物考』の著者である久松祐之が草しているが其の中で、京山は笹山藩青山氏に仕えた頃から晩年に至るまで手に書物を離さなかったとも云っている。此のような次第であって、寧ろ隨筆と云うよりは、女装に関する風俗史の好資料と見る方が適當であるかと思われる。京伝、京山兄弟は作家として、又此如き考証隨筆家として重んぜられているが、作家としての成果は兄に稍劣るとしても、本書の如きものは『骨董集』や『奇跡考』等と共に

に後世同学の士を利する事大である。本書前編と称し、後編目録を附しているが、後編は遂に成らなかったようである。

本書は、この弘化四年の刊本の外に、明治年間の版本もあると云う。活字本として流布しているのは、『百家説林続編』中に収められたもの及び本大成旧刊本とである。

京山の略伝は、本大成二期第七卷「蜘蛛の糸巻」の解題に記したから、同書を参照せられたい。本稿を草せんとして、三村竹清翁の『本の話』を見たら、「山東京山の死」なる一項が目についた。京山と親しかった表具師高築氏に贈った歌が挙げられている。

病にうちふしける九死をのがれて、

白あさきけふも八十通り町 九十の命ひらふ床上げ

京 山 ④

この年ころりが流行して多くの人が歿したと『武江年表』に記されているが、『名人忌辰録』によると、「娘の方へ一泊して知らぬ間に死せり」とある。此れは正に大往生である。人の歿する時の記事など知り得る事は少ないので、ここに附記しておく。

書 僧 贅 筆 一 卷

著 者 未 詳

本書は、天保十年に、雪の屋と号した書賣あさくらみつとも増共といふ人が、同胞の居る大江戸の町から、隅田川の辺りなる須崎に居を移し、日毎に大江戸の市に出て其の営みを続け、我輩ともがらのために、この一書を成したとある。著者については、是より外に知るよしがない。

内容は全部書誌関係のものばかりで、「享保年中御用にて、新国史以下十一部の書籍御吟味之節仰出され候御触書のうつし」に始まって最後に当時の書物の価格を記入している。この書物の売価は、

現代から見ても、愛書家等の興味を引くものであるうか。三村竹清翁は『本の話』に本書を引用、この跋文とこの書価の所を引用しておられる。和漢の書誌に興味を持たれる方は一見して然る可き書である。本書再刊に当っては、内閣文庫本、国会図書館蔵本の写本を照合した。活字本としては旧刊大成本が刊行せられて流布している。

檣の落葉物語 一卷

伴林光平 著

本書は仏家に生れて其途に精進して一家を成してから、漢籍を修め、遂に皇道に目覚めた情熱の努力家であつた著者が、余技としての戯作で、仏雛上人と云う放屁癖のある僧の物語で、附録の放屁音義と共に一時のなぐさみに草した仮作の戯著である。放屁音義は法華音義の洒落である。嘉永四年に成つたとあるから、四十二歳頃の作で、既に僧籍を去つて、皇学を身につけた時分の作である。作者と共に、気楽に笑つてすまされる作品である。本書は、無窮会蔵本の写本によって旧刊大成本に入つて活字本として流布したが、藤井乙男編『校註雅文笑話集』にも収められて、其の才筆が認められている。

伴林光平は河内国志貴郡林村の人で、文化十年九月九日に真宗の僧の子として生れた。僧侶の法名は周永又大雲と云つた。若くして摂津国川辺郡下市場村の寺に修業中、歌人中村良臣に認められ、因幡国の飯田秀雄の門人となり、次いで加納諸平の門人となり、又伴信友に従つて陵墓の調査などにも従つた。かくの如く本居系の国学者の間に身をおくようになって、皇道の大義を知り、僧籍を脱し、伴林光平と名乗ることとなつた。時恰も藤本鉄石が中山忠光卿を擁して十津川に義兵を挙ぐるや、馳参じて、其の文書の係りとなり、勇戦奮闘したが戦利あらず。岩船山に來た時に身体疲れ果てた所を

捕えられて、奈良奉行所に送られ、獄中に呻吟する身となった。この間に書き上げられたものが『南山踏雲録』である。後、元治元年京都に護送される事になるが、其の前後、獄卒等に本居宣長の『直毘霊』を講じて聞かせた所が、光平の気魄に撃たれた獄卒等は頭を垂れ涙を流して謹聴したと云う事が伝えられている。かくて元治元年二月十六日天忠組の徒安積五郎等十九人と共に、光平も斬罪に処せられた。享年五十二、明治十四年十二月從四位を追贈された。伴林光平の研究は、国学者、歌人等の研究の外に勤王志士として、世の注意を引くものが多く、著書としての『籠中追記南山踏雲録』の外にも、小野利教編『伴林光平全集』や佐佐木信綱編『伴林光平全集』などもあり、宮内庁蔵版の『殉難録』稿卷十三、『徳川時代和歌の研究』所収内山泰一稿『伴林光平の人と歌』、森敬三著『幕末歌人の研究』にも取り入れられている。其の他種々多いが、其の研究目録は法政大学史学部編『日本人物文献目録』などを参照せられれば其の概要を見る事が出来る。

金 曾 木 一 卷

大田 南 畝 著

著者南畝は、文化五年十二月に玉川治水視察を命ぜられ、六年正月は是政村にて正月を迎え、玉川諸村を巡視して、二月三十日には小金井に咲誇る桜花の美事なるのに感歎し遠桜と号した。而して三月に稿を脱したのが『玉川砂利』、『向岡閑話』、『玉川余波』であり、四月には『玉川披砂』、五月には『調布日記』が成っている。而して五月二十九日から起筆して、七年八月成稿したのが本書である。其の健筆驚くべきものがある。金曾木の題名は、江戸で金杉と呼ばれる地が、芝、蓑輪、小石川とあり、金杉は『長祿絵図』に金曾木とあり、南畝の住居遷喬楼が金杉水道町に近かったので、かく命ぜられたと云う。内容は其の見聞隨筆で、江戸市中の俗事、幼時の懷旧談、江戸文化頃の儒者の評

判、其の他八十四項にわたり、何れも興趣豊かな文業である。明治以前の刊本はなく、本大成本及び『蜀山人全集』に依つて世に流布するに至った。大田南畝については本大成第一期第二卷「仮名世説」の解題に略記したのを見られたい。同じく十四卷「奴師勞之」の条にも諸家研究書を追記しておいた。

のこぎりくずものがたり
鋸屑譚

二卷

谷川士清 著

本書は、『日本書紀通証』や『和訓栞』などで高名な著者の随筆で、自ら語釈等に関する事も多いが、後学のために多くの益を与えた書である。事物の字義、語原、地理、歴史等々に就いての考証随筆である。其の書名は、蘇軾の詩に、高論無窮如「鋸屑」とあるに基づくものである。単行本は二卷二冊であるが、孫清逸の校讐によつて世の知る所となった。士清は安永四年の歿年の前の年の五月反故塚を建てて、『日本書紀通証』と『和訓栞』の草稿を収めたと云う。幸にして『鋸屑譚』は自筆原本一冊が静嘉堂文庫の松井簡治博士旧藏本中にある。但し刊本とは異なつて、全部漢文で書かれている。而して延享戊辰（四年）四月初稿、同年寛延元年九月十七日に稿了していることが知られる。著者二十九歳の業績である。用紙の判心には「家蔵」「恒徳堂」の印記がある。内容は清逸校本の刊本より分量は多く、時に頭註等も見られる。賀茂季鷹の註記の見えるのは、勿論著者歿後の記入である。而して刊本に収められたものには、朱点が施してある。

谷川士清^{こしかが}は伊勢国安濃郡洞津の人、名は昇、士清、字は公介、通称養順、淡斎と号した。神道家、国学者、医家として名が高かった。神道は山崎派の玉木葦斎を師とし、有栖川職仁親王の門人として和歌を修めた。又医を福井丹波守の学系を代々受けたと云われているが其の人を確かにしていない。其の若き時代に京都に出て、諸学を修得した模様である。学成つてからも、諸侯に仕える事を辞して

僅かに藤堂高朗侯の客分となったに過ぎなかった。宝永六年二月二十六日に生れ、安永五年十月十日に歿した。享年六十八。

其の伝記に就いては、『国学者伝記集成』にも其の概要はあるが、加藤竹男著『国学者谷川士清の研究』、北岡四郎稿「統和訓栞成立私考」(皇学館紀要第七輯所収)など其の他諸家の研究も多い。なお研究資料として、静嘉堂蔵「万葉集」二十卷には刊本に自筆の書入れがあつて、「寛保第二壬戌十一月廿一日以樋口氏蔵書註畢 谷川士清」とあるのも注意すべき一本であろうか。

目次

睡余小録	一
八水隨筆	二五
歷世女裝考	一四
書僧贅筆	三九
檜の落葉物語	三七五
金曾木	三三
鋸屑譚	四二

（解題 丸山季夫）

睡餘小錄

乾坤

懷錄小錄序

[illegible]

[illegible]

なまのちをふくむる集にたゞし
 はなれくちひのこゝろに
 ふもつたふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた
 まはるふもつたふもつた

月もあつてつるはさくはく
 下もあつてふもいのもはく

文化三年瑞月

西村勘解由判官出羽守正邦主

源内勘